# 外科医の責任（現在の様相および将来の展望）

## ――外科チーム内での責任決定――

尾中普子

一九七九年八月十九日から二三日の間古き伝統の町ベルギーゲント市のゲント大学で開催された第五回医事法世界会議に出席し、世界各国からの医療、法律関係学者の報告を聞く機会を得た。その内容は、知らされた自由の同意から強制的な治療、生命上の権利から生きる権利、医師、社会、法に関する現在の指針を始めとして健康管理の分野における国家の権利と義務、病院での医師と患者との関係等、および健康管理における責任に関するもの等の広きにわたっている。ここでは、フランスのパリ控訴院弁護士アニック・ドルスネールおよびアニーセマナによる外科医の責任―その現状と将来の展望―の中から、第一の課題である外科チーム内での責任決定について紹介したいとおもう。

一九三六年五月二〇日に破毀院第一民事部が原則判決を出して以来、外科医は、手段の契約責任を負うとされてきている。したがって外科医は、患者が医療契約の範囲内で外科医が犯したとおもわれる不注意または軽率による過失の存在（いかに軽微なものであっても）を証明出来た場合にだけその責任を問われるとされていた。しかし、その後医療技術の高度化に伴って職務の専門化が進み、医療行為に集団的性格が与えられるようになった。所謂チームの設立であり、この中で外科医は、サヴァティエ氏の言葉によれば「手術チームのブロックが形成するこの船の船長」とみなされるのか、またはその船長は四二〇人のクルーの中の

一員の役割を努めるのにとどまるべきなのかという問題が提起される。このような状況の下で、医師チームの中での責任の配分、特に外科医と麻酔医の責任の配分について検討してみる。

**外科チーム内での責任の決定**

当初は、外科医は床屋の承継者であり、職人としてその技術を発揮していた。そこには麻酔「術」は存在していなかった。スタンレイ・キュルブリックのあの映画「バリー・リンドン」の中の戦慄を与えるシーン喚起されたい。主人公が逞しい介添人達の応援のおかげで動かなくされ、そして盃になみなみとつがれた酒を一杯あおって気をもち直して、切断手術を受けるシーンは記憶に生々しい。

二〇世紀の初めには、麻酔〔術〕はいまだ萌芽期にあり、エーテルまたはシュレイシュ混合物の吸入によって確保されていた。麻酔を行っていたのは、手術医の監督および責任のもとでの役割を限定された助手達であった。その後、薬理学の進歩に加えて、静脈麻酔術が有毒物の使用を可能にし、この技術をより大幅に導入するに際して、医師の特別の養成が必要となった。これらの状況の中に、一九四七年麻酔学専門教育証書の制度が創設され、麻酔医、蘇生術専門医の学位へと導かれるのである。

今日、麻酔学は、外科〔学〕には欠くべからざる専門〔学〕となっている。若干の判決は、法文の要求をこえて、局部麻酔についてさえ、麻酔医の協力を確保しないことを軽率とみなしている。(1)

外科医の側で、たとえば麻酔医のような彼ら自身も医師である専門家―の立会いは、この手術への二人の参加者の間で、責任の配分について疑問を生じさせることになる。手術技術の過失による事故の責任は、まさに明らかに外科医が引き受けるということについては反論の余地がない。これに対して、事故が麻酔と関係のある行為の結果生ずるものであるときは、誰が責任を負うのであろうか？　麻酔医だけの責任であろうか？　外科医だけの責任であろうか？　または二人の共同責任が問われるのであろうか？

この問題は、刑事事件としても、民事事件としても提起さ

れる。何故なら患者は、臨床医の刑事責任または民事責任を争うことを選択できるからである。

刑事裁判所の面前で、外科医、および麻酔医は、彼らを患者に結びつける契約関係とは別に、刑法第三一九条、三二〇条に基づいてでなければ、その責任を負うことはない。実際に、刑事責任は個人責任である。すなわち過失傷害、過失殺人の軽犯を構成する軽率、不注意によるその者の過失の責任は、医師のそれぞれが負わなければならない。それらの裁判所の前に、麻酔医に対して言い渡された判決について、民法典第一三八四条五項の適用において、外科医が民事的に責任を負うか否かを決定できるのかという問題が提起される。ヴェルサイユ大審裁判所は、麻酔医は外科医の共犯とみなされるべきであると主張して、外科区は民事的に責任があると答えるのにためらわなかった。(2)

我々としては、外科学、麻酔学の二つの分野のそれぞれの特殊性は、行使について、服従関係のすべてを排する自治的条件を含んでいると考える。ヴェルサイユの司法官の判決は、第一にパリ控訴院の判決によって破毀されている。民事面では、裁判所は、その判決の積み重ねにより患者と麻酔との間に契約関係が存在するか否かで相反する解決に達する判決例を作った。患者が外科医だけとしか契約しなかった場合に、患者は選択権を有する。すなわち患者は、過失責任に基づいて麻酔医に対して訴訟を提起することができる。反対に患者は、麻酔医の行為について外科医の契約責任の追及を選択することができる。民法典第一一四七条は、実際に「債務者は、必要がある場合には、その者の側になんら悪意が存しない場合であってもその不履行がその者の責めに帰すことができない外在的事由から生じたことを証明しないときはすべて、あるいは債務の不履行を理由として、あるいは履行の遅帯を理由として損害賠償の支払いを命じられる」と規定している。この法文の文言では、義務の履行を妨げるために第三者が関与するとき、その行為は不可抗力とみなされる。しかし契約の範囲内で代理人を招じ入れるのが債務者自身である場合には、その者の活動は、もはや〝その者の責に帰すことのできない外在的事由〟としてみなされることはできず、したがって、

債務者が責任を負う。このようにして、医療契約の行使において、麻酔医を招じ入れた外科医は、患者の意思とは関係なく、その者が代わりになる医師の損害を与えうる活動について、責任を負わなければならない。他人の行為についてのこの契約責任は、それ故外科医と麻酔医との間の服従関係から生じるものでは少しもなく、リヨン大審裁判所の司法官のとった誤った分析に対立するものである。(4) 麻酔医の行為についての外科医の契約責任を保持するこの判例には不都合がないという訳ではない。外科医は、有責判決を避けるために、麻酔医の全ての行為を努めて監視するおそれがある。このようにして外科医は、手術行為からその注意をそらし、それが要求する集中はすべて、もはや手術行為には与えないおそれがある。

確かに外科医はこのような有責判決をおそれることはないといえよう。何故なら、いずれにせよ外科医は麻酔医に対して訴えることができるからである。それは損害賠償の訴がその性格上名誉を毀損するものであることを忘れているからである。非常にしばしば生ずることであるが、訴訟騒ぎのために、外科医は評判を落してしまう。外科医と麻酔医が契約を締結した場合において、破毀院は、二人の医師のそれぞれは、自己の領域内で行われた過失について責任があることを考慮する。したがって麻酔医だけが麻酔から生ずる過失について責任を負うということになる。(5) この解釈は、契約責任の原則の正確な適用である。これは、麻酔〔学〕と外科〔学〕の二つの専門分野のそれぞれの特性を尊重するという長所を有している。しかし、この解釈を適用するためには前提として、契約が麻酔医を患者に結びつけているという場合を決定することが要求される。

第一段階で、破毀院は、この契約の存在は患者と麻酔医との間の事前の契約に従わせられていると考慮した。事前の契約とは、手術の前日に麻酔医により行なわれる検査のようなものである。一九七〇年五月二七日の判決以来、破毀院は、患者が民法典第一一四七条に基づいて外科医と麻酔医に対して二つの損害賠償の訴を行使するという事実だけで、二つの別個の責任を伴う、二つの異なった契約の存在を含んでいることを認めている。この判決から到達する

解釈は、責任の健全な配分に合致するとおもわれる。しかし、これがよるところの分析は、反対に疑わしいものである。

破毀院が出した分析の文言では、契約の実現は、結局、患者と、その弁護人等の訴訟手続の決断力だけに依存している。患者が外科医だけを訴える場合には、外科医は契約により麻酔医の行為について責任を負うことになる。反対に、第一一四七条に基づいて、患者が外科医の他に麻酔医を訴える場合には、これらの医師のそれぞれが固有の責任を引き受けることになる。法律上、契約の存在は、一致する二つの意思の遭遇だけを含んでいる。したがって、契約の存在は、決して責任を追及する際の根拠に依存するのではない。このような契約の存在を認め、または否定するために麻酔医、外科医および患者との関係の具体的分析をすることは、事実審裁判官（Juges du fond）の任務である。そして、事実審裁判官が契約の存在を認める場合にのみ第一四一七条に基づいて麻酔医が責任を負わせられる。

破毀院の考えに添って、すべての場合において、麻酔医と患者との間に契約関係の存在を認める必要があるとおもわれる。この契約関係の存在を認めなければ、医師等のそれぞれの独立と責任を保持することはできない。しかしこのためには、異なる主役間に存在する関係を別々に研究しなければならない。外科医と麻酔医との間の関係において、他人のための約定があることを認めるのが適当であろう。すなわち外科医（要約者〈Stipulant〉）は、患者（第三受益者）のために、良心的で注意深い治療をする義務を麻酔医（諾約者〈Promettant〉）に約定するのである。患者は外科医を信頼しているので、暗黙にこの約定を受け入れることになり、この事により患者は、すべての場合において、契約に基づいて麻酔医に対して「損害賠償」責任を主張することが認められるであろう。

前述したように一方では患者と外科医を結びつけ、他方では患者と麻酔医を結びつける契約関係を認識することによって、刑事責任が問われるのと同等の条件で、医師等のそれぞれは、各自固有の専門領域に属する行為のために責任を有することを認めざるを得ない。しかし〃例外のない

原則はない〃ように、判例は、各々の医師の責任の原則にも拘らず、それらの者に共通する義務も存在することを考慮した。実際に判例は、患者の安全について不可欠ないくつかの一般的な慎重が、二人の医師によって守られることを要求している―。それはむしろ、麻酔医の領域に属することではあるが―。

破毀院は、一九七二年六月二二日に、二つの判決において（その中の一つは「アストラガル」（Astragale）の著者に関するものである）、第一の事件では、手術前に患者の胃が空になっていることを審査なかったことによりおよび第二の事件では、輸血装置の設置を確保しなかったことにより、外科医と麻酔医は両者共過失を犯したことを決定した。しかし共通の義務の存在には批判の余地があるとおもわれる。麻酔医は、外科医の手術行為を実施させるために、手術を受ける人に麻酔をかける任務を有している。麻酔医は手術行為の間中、患者の心臓、血管および呼吸状態を監視しなくてはならない。麻酔医は手術を受けた者が完全に意識を回復するまで、患者に付き添い、監視する絶対的義務を有する。我々によれば、麻酔医としての任務の全責任を確保することは、麻酔医だけに属するのである。

手術技術に属するある過失について、麻酔医に責任があると考えられるであろうか？　否である。それでは何故、麻酔医に課せられる任務に属する義務を外科医に引き受けさせるのであろうか。麻酔医は外科医と同様に専門医ではないのであろうか！

この第一部における研究を終了する前に、セーヌ大審裁判所の判決を報告する必要がある。[6] この判決は医療行為の共同的性格から派生する諸責任の決定の問題について、一つの独創的解釈をもたらそうと試みたものである。セーヌ大審裁判所の司法官等にしたがうと、チームの概念は、現実に最も適合する法律解釈を与えているようである。〃すなわち、医師が病人等を治療するためにチームを構成する事実から医師は、その者の間で患者と接触する者に、その者の名で患者と医療契約を締結することについて暗黙のうちに委任を与えるものである。……医師は、契約から生ずる義務を共通に負うと理解される〃とそれらの司法官は

つけ加える。この大胆な構成は、〔医師〕義務法典（Code déontologie）によって定められ、医師の独立を受けとめるだけとみられる医師の個人責任の基本規則に全く対立するものである。その上、そのためにこそ、これは全く孤立した判決となっている。

## 付記

なお本会議には日本からの参加者として、杏林大学医学部穴田秀男客員教授による「医師の地位向上と診療過誤防止の基本対策に対する提案」、都立大学法学部唄孝一教授による「カレン・クインラン事件の虚像と実像について」、帝京大学法学部石田雅男助教授、同大学中井臣久講師（共同）による「日本に於ける病院の医療事故に対する開設責任」の研究発表がなされた。

## 注

(1) Cass. civ. 27 Jawriev 1970. J. C. P. 1970. II, 16422. Note Rabut.
(2) T. G. I. Versailles 11 décembre 1970. II, 16755.
(3) Paris Ier Juillet 1971, Caz. Pal. 1972, Ier semstre, p. 53.
(4) T. G. I. Lyon. 27 November 1973, J. C. P. 1974, II, 17652.
(5) Cass. Civ. 27 mai 1970, J. C' P. 1971, II, 16833.
(6) T. G. I. Seine. 3 Mars 1965, J. C. P. 1966, II, 14582.

**5e WERELDCONGRES VOOR MEDISCH RECHT CONGRÈS MONDIAL DE DROIT MÉDICAL WORLD CONGRESS ON MEDICAL LAW WELTKONGRESS FÜR MEDIZINISCHES RECHT**

**19-VIII**

**ZONDAG-DIMANCHE-SUNDAY-SONNTAG**

**17.00**
*Openingsvergadering*
*Séance d'ouverture*
*Opening session*
*Eröffnung des Kongreesses*

Toesprapen door-allocutions de
Speeches by-Ansprachen von

**Prof. Dr. W. SPANN**
Voorzitter van cet Congres
Président du Congrès
President of the Meeting
Präsident des Kongresses

**Prof. Dr. Eg. SPANOGHE**
Voorzitter van de Wereldvereniging voor Medisch Recht
Président. de l'Association Mondiale de Droit Médical
President of the World Association for Medical Law
Präsident vom Weltverein für Medizinisches Recht

**Prof. Dr. H.J.J. LEENEN**
(Amsterdam, The Netherlands)

**The right to health care and the right of selfdetermination**

**20-VIII**
**MAANDAG-LUNDI**

I

**9.00**

O. GSELL (Suisse)
Directives éthiques et juridiques de l'Académie Suisse des Sciences Médicales.
W. SZYSZKOWSKI (Pologne)
Traitement imponé, libertés civiles et protection de l'intimité.
R. LAHTI (Finland)
Voluntary or compulsory treatment
Some trends in Finnish law. Coffee
M. VAN MOFFAERT (Belgium)
Informed consent in anti-androgenic therapy of sexual delinquents and subnormals disturbing sexual behaviour.
M.C. SHERMAN-F.S. ABUZZAHAB Sr. (U.S.A)
Informed consent-Legal requirements in psychiatric practice.
L. TODOROVA-P. DONTSCHEV (Bulgaria)
Annurance versus limitations of patient's rights.
G.S. EL-ASSAL (S.P. Libyan A.J.)
Some aspects of forensic psychiatry.
J. STOLINOVA (CSSR)
Ärztliche Aufklärung der Familie aus Juristischer Sicht-Pflicht, Zulässigkeit, Grenzen.

**14.00**

N.W. DE SMIT (The Netherlands)
The right to treatment; the right to resist treatment and the criminal justice system.
C. ROY (Canada)
The issue of informed consent and compulsory

**20-VIII**
**MONDAY-MONTAG**

II

**9.00**

G. PASTRFANA (Philippines)
The right to health and medical care: ethical considerations from the perspective of a developing country.
P.A. MOLINARI (Canada)
Les droits des bénéficaires dans le réseau de prestations des services de santé dans la pro?ince de Québec.
H. NYS (Belgium)
Rights and duties of the state in the field of health care: Belgian health care planning.
U. SERNER (Sweden)
The regulation of quality and patients' in recent Swedish legislation.
J. MILCINSKI (Yougoslavie)
Les droits du malade dans le processus de soins en Slovénie.
G. POPESCU-O. BERLOGEA (Roumanie)
La relation médecin-patient dans l'approche prospective du modèle de soins médicaux.
J. VANCO (CSSR)
Die Rechte und Pflichten des Staates im Verhältnis Vertrauensarzt-Arbeitsunfahiger Patient.

**14.00**

A. CARMI (Israel)
Medical law in the nineties.
P. COCLE (Belgique)
Vers une nouvelle définition de la responsabilité professionnelle.

treatment.
The experience of a prison psychiatric hospital in Canada.
J. BERNHEIM (Suisse)
Médecine pénitentiaire, service universitaire.

Coffee

G. DOBROTKA-M. KOKAVEC (CSSR)
Therapie der Aggressiviät als Bestandteil des Strafvollzuges.
J.-M. AUBY (France)
Le consentement en matière de stérilisation. Eléments de droit comparé.
B. GONZALES (U.S.A)
Voluntary sterilization:
Counseling as a Pre-Requisite to Informed Consent.
F. OLIVEIRA SA-B. BARRETO (Portugal)
Le droit et la stérilisation chirurgicale de la femme, au Portugal.
R.P. KOURI-M.A. SOMERVILLE (Canada)
The sexual strilization of mental incompetents in Canadian civil and common law.

**21-VIII**
**DINSDAG-MARDI**

I

**9.00**
C.K.N. RAJA (India)
From informed free consent to compulsory treatment in the field of abortion and sterilisation. -A study with particular reference to Karnataka state.
B. BERIC (Yougoslavia)
Medico-qegal aspects of modern variations of motherhood.

J. MANDEL (DDR)
Die materielle Verantworrtlichkeit für Gesundheitsschaden.
H. SCHULTZ (U.S.A.)

Coffee

Special lialility problems of the Health Maintenance Organization (HMO)
R. COLLINS (New Zealand)
Liability without fault in New Zealand and the medical malpractice suit.
M. BRAVERMAN (U.S.A.)
Liability without fault in workers' compensation.

**21-VIII**
**TUESDAY-DIENSTAG**

II

**9.00**
A. DORSNER-A. SCEMANA (France)
La responsabilite du chirugien: aspects actuels et perspectives d'avenir.
O. PRIBILLA (BRD)
Haftüngsgründlagen im Arztrecht der EWG-Staaten.
P. MICHAUX (France)

H. SJÖVALL (Sweden)
From duty to bear to freedom of choice. Nativity and legal abortion in Sweden.
B. ERREY (Australia)
Therapeutic terminations sidestep Old. Abortion laws.
Z. MAREK-E. BARAN (Poland)
Permissibility of abortions in Poland. The situation after 20 years of the bill being in force.
C. KERR (Australia)
Amniocenteses and abortion.
F. DONNER-P.O. HUBINONT (Belgique)
Interruption volonaire de grossese (IVG):
Conflit d'existence?
R. DUTTA (India)
Legal aspects of fertility control.

**14.00**
J. CUSINE (Great Britain)
Medico-legal implications of artificial insemination by donor.
M. DRORI (Israel)
Artificial insemination donor: is it adultery according to Jewish law?
LIPNICKI (Poland)
Law problems of genetic engineering.
B. ALISIEVITSCH (USSR)
Some ethic and law aspects of the tissue and organ transplantation. Coffee
J.D. DALGETY (New ZEaland)
Koison in the system.
U. DERBOLOWSKY (BRD)
Das Medizinische Recht im Rahmen menschicher Grundrechte.

Critique de la théorie de la "perte de chances"
L. NEORAL (CSSR)
Experts committees-Tasks and functions.
H. ANADÁA (Japan)
Fundamental measures to improve the position of medical doctors and to prevent mis-diagnosis.
J. STEPAN (CSSR)
Niveau des cnnaissances juridiques des médecins et son influence sur l'exercice de la profession.
P. MARLIN (France)
Ethique médicale, morale professionnelle et excrcice de la médecine à l'établissement de soins, particulièrement l'hôpital.
Collégialité médicale.

**14.00**
M.A. NOUR (Saudi Arabia)
The rights of the patient in the hospital. A medical social work approach.
K. SCHUTYZER (Belgique)
Charte du malade, usager de l'hôpital.
P.-H. CREPEAU (Canada)
La responsabilité civile de l'établissement hospitalier.
M. ISHIDA-O. NAKAI (Japon) Coffee
Responsabilité des établissements hospitaliers au Japon.
J.E. MAGNET (Canada)
Aspects of hospital liability in common law Canada.
S.A. STRAUSS (South Africa)
Hospital liability for delicts committed by professional personnel.

I. LADIMER (U.S.A.)
The Declaration of Helsinki as a living document.
H. ROTH (Österreich)
Die Entwicklung der ärztlichen Gelönisse im gegenwärtigen Osteuropa.

**22-VIII**
**WOENSDAG-MERCREDI**

I

**9.00**
E. W. KEYSERLINGK (Canada)
Sanctiy of of life and quality of life in ethics, medicine and law.
Their relevance to the right to die.
G. GIERTZ (Sweden)
The doctor and severely ill patients.
Th. T. NOGUCHI (U.S.A)
Euthanasia in the U.S.A.: the need for standardized guidelines for physicians, hospital administrators, lawyers and theologians.
Y. SHAPIRA (Israel) Coffee
Euthanasia: from the point of view of Halacha.
S. STRAZISCAR-J. MILCINSKI (Yugoslavia)
Some attitudes toward euthanasia in Slovenia.
Z. P. SEPAROVIC (Yugoslavia)
Intensive care: some new legal dilemmas with special regard to right to die.
L. DEZSO-I. SZABO (Ungarn)
Ethische und Strafpolisische Erwägungen in Zusammenhang mit der Interpretation der Euthanasie.

J. OHLTMANN (BRD)
Geschichte der Arbeitszeitregelungen für Krrankenhauspersonal in der B.R.D.

**22-VIII**
**WEDNESDAY-MITTWOCH**

II

**9.00**
H. WALTHER (DDR)
Risiko und vermeidbarkeit von Arzneimittelschäden.
P. T. C. FORD (Great Britain)
Hazards in prescribing.
Groupe d'étude de L' "Associazione Italiana di Diritto della Medicina" (R. SESSO, C. PODO, A. FIORELLA, A. F. SABATO, G. M. DE FRANCISCI) (Italie)
Le problème de la responsabilité pénale dans les industries pharmaceutiques et des responsabilités pénales connexes pour les médicaments mis sur la marché à la suite de la prescrite autoriation et en conformité avec elle.
W. O. MORRIS (U.S.A.)
Dental litigation, past, present and future. Coffee
N. IANOVICI (Romania)
Medico-legal aspects of dentistry.
F. BSCHOR (BRD)
Die Berufsrechtqiche Situation des Arztes ber Ausserstationären Behandlung Drogenabhängiger in der Bunderrepublik Deutschland.
A. ARBAB-ZADEH (B.R.D.)
Strafvollzug bei Rauschgiftsüchtigen Delinqenten.

**14.00**
G. MEMETEAU (France)
La demande de mort du malade.
C. LORE (Italie)
Aspects et problèmen médico-légaux de l'euthanasie.
O. IELACIC (Yougoslavje) Coffee
L'euthanasie sur demande.
D. JOKANOVIC-I. SIMIC-A. NIKOLIC (Yougoslavie)
L'euthanasie á la demande du malade.
N. S. DONTAS (Greece)
Euthanasia and cancer.
J. EICHLER (BRD)
Humanes stemben-auch im Krankenhaus?
J. POUSSON-PETIT (France)
L'euthanasie sans demande.

**23-VIII**
**DONDERDAG-JEUDI**

I

**9.00**
P. DESCHAMRS (Canada)
Le nouveau-né malformé ou prématuré: les implications juridiques de son traitement en droit civil Québécois.
A. Mc CALL SMITH (Great-Britain)
Withholding and withdrawing treatment.
P. FRITSCHE (B.R.D.)
Verzicht auf therapie. Coffee
K. BAI (Japan)
Implications of the Karen Quinlan case

**14.00**
R. H. DICKSON (Great Britain)
The role of the procurator fiscal in Scotland.
J. L. ARDISSON-A. OLLIER-M. C. ROURE-A. RADISSE (France)
Relations hôpital-médecins à l'hôpital public.
R. DE LORENZO Y MONTERO (Espagne)
Ethique et légalité de la grève sanitaire en Espagne.
Z. MAREK-J. KOLODLIEJ-J. KUNZ-A. CROSS (Poland) Coffee
Suicides in Krakow in years 1881-1978.
D. JOKANOVIC-I. SIMIC (Yougoslavie)
Le droit de vivre et le droit à la vie du point de vue du problème des suicides.
B. BLOCH (Israel)
Choking by multiple stones and pieces of glass. Murder or suicide?
A. HEYNDRICKX (Belgium)
Toxicological results and interpretation of death.

**23-VIII**
**THURSDAY-DONNERSTAG**

II

**9.00**
N. S. PATEL (Zambia)
Traffic accidents in Lusaka.
W. ARNOLD (BRD)
Zur strafrechtlichen Behandlung von Verkehrsdelikten unter Medikamentbeeinflussung.
L. BURIS (Hungary)
The changes of ADH izouymes in chronic alcohol addicts under detoxications cure.
R. DÖRNER-V. SACHS (BRD)
Die Vaterschaftsvermutung mit Hilfe mathemati-

Real and imaginary.
C. Fr. HADDING (Sweden)
Suicide or euthanasia-A legal case.
G. MATHON-J. LIEFOOGHE e.a. (France)
Un droit de vivre, mais aussi un droit de mourir ?
A propos de l'euthanasie.

**14.30**
*Slotvergadering*
*Séance de clôture*
*Closing session*
*Schlussitzung*

**16.00**
*Algemene Vergadering Wereldverenining voor Medisch Recht*
*Assemblée générale de l'Association Mondiale de Droit Médicale*
*General Assembly of the World Association for Medical Law*
*Plenarsitzung des Weltvereins für Medizinisches Recht*

schstatistischer Methoden aus blutgmuppenserologischen Untersuchungergebnissen.
L. MILLER DE PAIVA (Brazil) Coffee
The psychosomatic study of the criminal delinquents-New contributions to the amygdaloid nucleus syndrome and the non-human syndrome.
M. K. NEWAN (U.S.A)
Medical legal significance of hand pain, on a neurovascular and neurological basis.
J. PINTO DA COSTA (Portugal)
L'enseignement du droit médical à l'Université de Porto-Portugal
A. DE LORENZO (Espagne)
Propéeutique pour un droit sanitaire intégré. Droit psychosomatique.